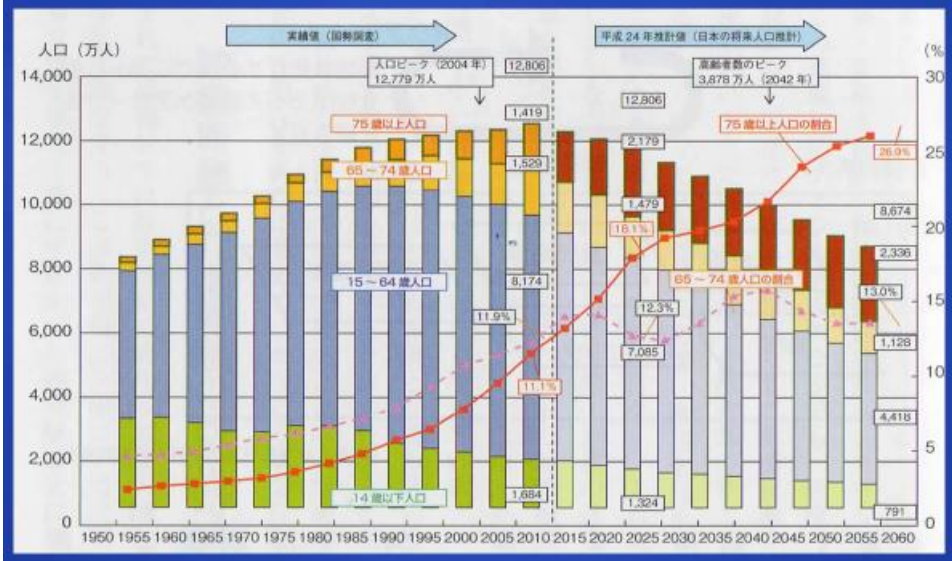
他人ごとじゃない乳がん

東京慈恵会医科大学
葛飾医療センター　院長
吉田和彦

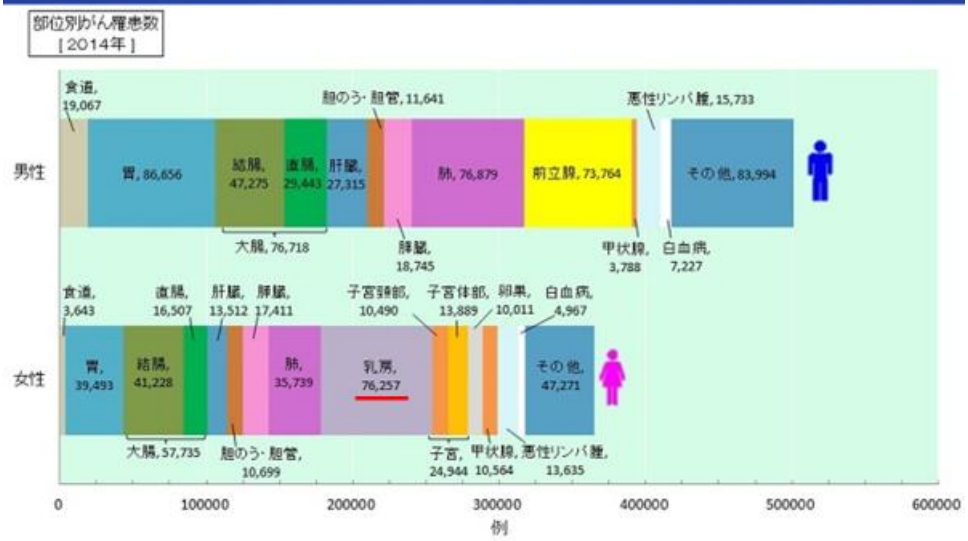
立川市主催　第17回くらしフェスタ立川
第83回　特別講演・学習会
於　立川アイム5階

75歳以上高齢者の急速な増加

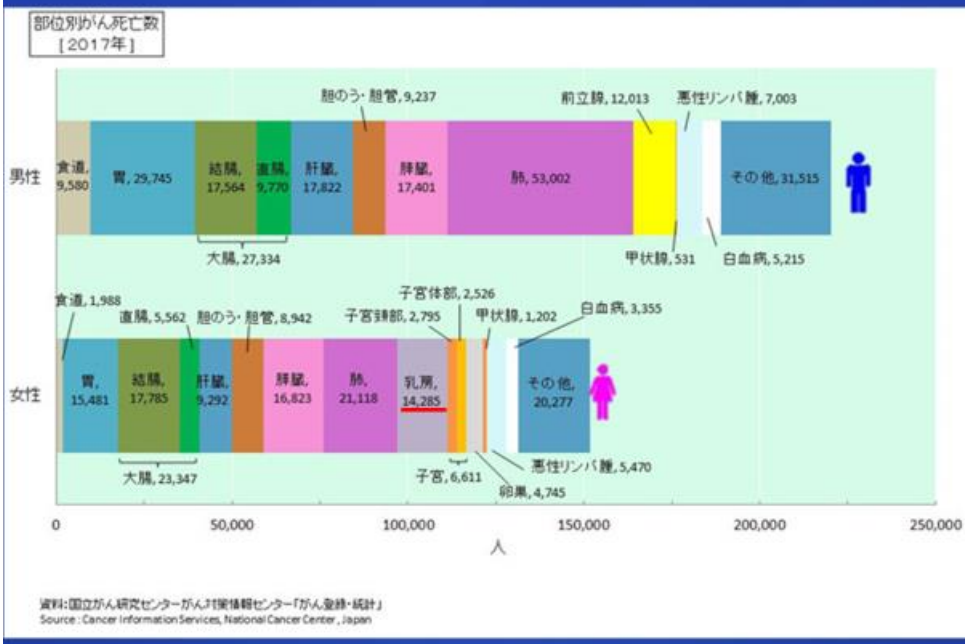


総務省統計局「国勢調査」国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推定人口」

- 2017年にがんで死亡した人は373,334人（男性220,398人、女性152,936人）。
- 2014年に新たに診断されたがん（罹患全国合計値）は867,408例（男性501,527例、女性365,881例）。
- 2016年に新たに診断されたがん（全国がん登録）は995,132例（男性566,575例、女性428,499例）*。

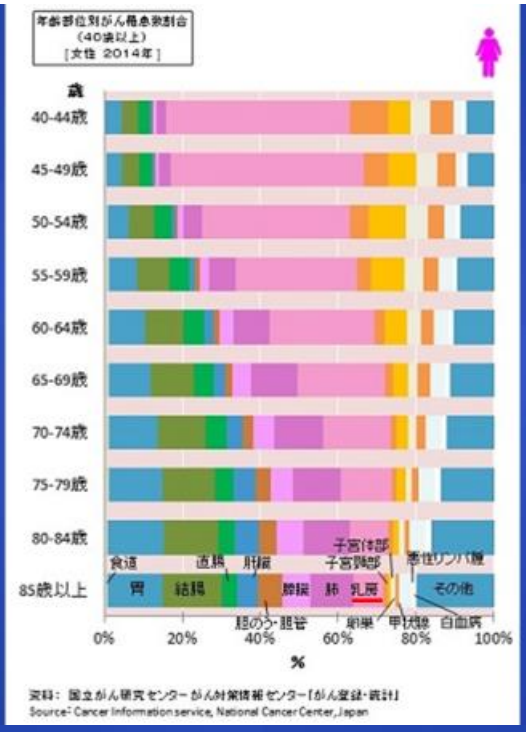


資料：国立がん研究センターがん対策情報センター「がん登録・統計」
Source: Cancer Information service, National Cancer Center, Japan



資料:国立がん研究センターがん対策情報センター「がん登録・統計」
Source : Cancer Information Services, National Cancer Center , Japan

- 男性では、40歳以上で消化器系のがん（胃、大腸、肝臓）の罹患が多くを占めるが、70歳以上ではその割合は減少し、前立腺がんと肺がんの割合が増加する。
- 女性では、40歳代では乳がん、子宮がん、卵巣がんの罹患が多くを占めるが、高齢になるほどその割合は減少し、消化器系のがん（胃、大腸、肝臓）と肺がんの割合が増加する。



乳がんの疫学

- 罹患率は30歳代から増加し始め、50歳前後にピークを迎え、その後は次第に減少する。
- 罹患者数は死亡数の3倍以上で、これは、乳がんの生存率が高いことによる。
- 罹患率、死亡率ともに一貫して増加している。
- 最近生まれた女性ほど罹患率、死亡率が高い傾向がある。
- 東アジアよりも欧米、特に米国白人の罹患率は数倍高く、米国の日本人移民は日本国内在住者より高い傾向がある。

日本人の乳がんの特徴と検診の問題点

- 罹患率が急速に上昇しているものの、欧米に比較すると1/3-1/4
  - 検診による死亡率の低下効果が生まれるかは疑問
- より若い女性（40歳代、30歳代の後半）の罹患率が高い
  - 高濃度乳房が多いのでマンモグラフィーによる検診効果が出にくい

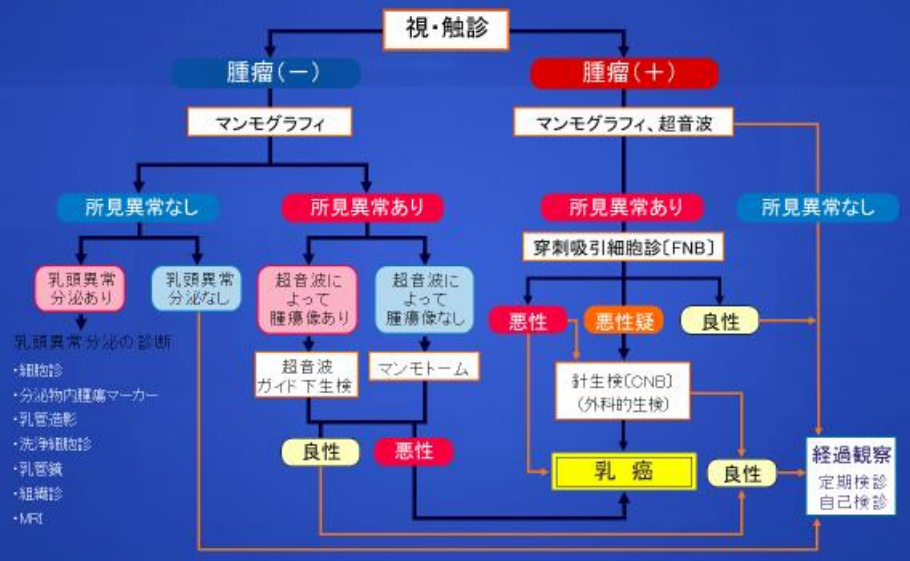
乳がんの症状

- 乳房のしこり
  - 外側上部に好発
  - 石のように固く、不整形で境界もあいまい
  - 指で押しても動かない
  - 押しても痛みはほとんどない
- 乳房のえくぼなど皮膚症状
  - えくぼのようなくぼみ
  - 皮膚が赤く腫れる
  - 乳頭からの血の混じった分泌液
- 乳房の近傍のリンパ節の腫れ
  - 脇の下、胸骨のそば、鎖骨の上下のリンパ節へ転移すると、腕のむくみやしびれがでる
- 遠隔転移の症状

まとめ（検診）

- 本邦では乳がんの罹患率と死亡率が上昇しつつある。
- 乳がんによる死亡者を減らすには、効果の高い二次予防（検診）と効果的な治療の普及と進歩が求められる。
- 日本人女性の乳がんの特性を知る必要がある。
- マンモグラフィ検診の効果向上については、今後の罹患率の上昇を考慮した上で、受診の絞り込み、高い精度管理、超音波検査の併用、などに取り組むべきである。

乳がん診断の基本的な手順



乳がん治療の特殊性

- 体表に生じるガンなので、ほとんどの患者さんが告知を受けている（情報の公開性/透明性を高めざるを得ない）
- 他の固形ガンに比較して、治りやすい（生存率が高い）
- 手術、放射線療法、抗ガン剤、ホルモン剤などの治療効果はいずれも高く、治療の選択肢に幅が広い
- 各治療法の効果のエビデンスが多く報告されており、世界的な標準治療の内容が明らかで、入手しやすい
- 再発しても生存期間中間値は18ヵ月以上あり、治療による延命効果も期待でき、生存の質も高い

乳がんの予防

- 運動やカロリー摂取の制限により肥満を防ぐ
- アルコールの摂取を控える
- 出産や育児ができやすい社会環境の整備